

ヨーロッパの クリスマス文化と 美術・音楽

2017.12.13(水)→21(火)



運営・司会：仲町 啓子氏
実践女子大学 文学部 美術美学史学科 教授

渋谷キャンパス1階の会場において、クリスマスの到来に合わせてヨーロッパの人形飾り「プレセピオ」でキリスト降誕シーンを再現するとともに、色鮮やかな中世ヨーロッパの彩飾写本（複製）を展示。また、期間中の12月16日には、中世フランスにおけるクリスマス音楽（ノエル）の進化や、今回展示した彩飾写本の楽しみ方などについて知識を深める講演会を開催。来場者からは、活発に質問が寄せられました。

講演 12月16日(土)

中世フランスのノエルと音楽：伝承から創作へ

中世フランスにおいて、ノエル（クリスマスの音楽）はどのような経緯で生まれ、発展していったのか。日本ではあまり聞く機会のない実際のノエルを折々流しながら、西洋音楽史を専門とする講師が解説しました。

■キリスト教の宗教音楽にルーツをもつノエル

「ノエル」という言葉には、降誕祭（nativitas）、つまり「キリストが生まれた日」のほか、「民衆が教会の外でクリスマスを楽しんで歌う歌」「年末に歌うお祭りの歌」の意味があります。現在知られている中世のクリスマスの歌はグレゴリウス聖歌と呼ばれるラテン語のお祈りの歌ですが、歌い継がれる中で少しずつ新しい要素が入り、民衆の歌の要素が混ざることもありました。

クリスマスのミサで歌われる聖歌の、現在確認できる一番古い楽譜は9世紀末のもので

当時、楽譜は音の高さを表現しておらず、読み取ることができるのは音の動きだけでした。そのためもとと旋律を知らなければ、この楽譜を見て歌うことはできませんでした。ところで、クリスマスのミサで最初に歌われる「私たちに子どもが生まれた」では、その「子ども」が幼子イエスのことを指すとは言っていません。そこで9世紀以降、歌詞に、その子どもはどういう人なのか解説をつけようという考えが生まれます。このように、伝統的に歌い継がれてきた聖歌を解説する形で、西洋音楽は発展していきます。元の聖歌を長くして間にいろいろ解説の歌を挿入する、もともとある旋律にもう1つ他の旋律を対置する、歌詞のない部分を使って新しいラテン語の歌をつくる、といった手法も出てきます。

そうして出てきた新しい曲を集めた新曲集が、各地で編纂されるようになります。その中で、もともとラテン語の歌詞だったものに民衆の言葉であるフランス語の歌詞が混ざり込んだり、教会の外で親しまれている音楽の影響が紛れ込むことも起こります。元は神聖な歌だったものが、悪ふざけするような内容も書かれるようになっていきます。12世紀のノートルダム聖堂ではそういった度はずした歌を教会の中で歌うことを禁じ、その代わりに2～4声でハーモニーになる、訓練を必要とするような少し高度な歌を歌いなさいというお触れも出ています。当時のパリは経済活動が活発で、多くの人が集まってきていました。その中にはより高い教育を求める、勉強好きな人たちもおり、中でも音楽好きな人たちが、何人かで一緒に歌うために音の長短のわかる新しい楽譜の書き方を確立していきました。

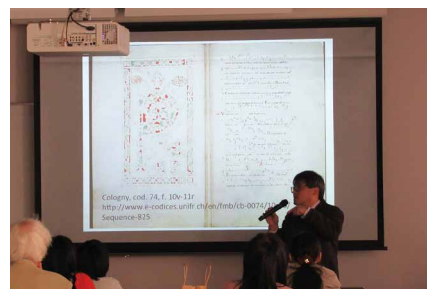


講師：西間木 真氏
東京藝術大学 音楽学部
准教授

■クリスマス音楽は、西洋音楽の根本に関わる存在

まとめると、ヨーロッパの歌が楽譜として書き残されるようになったのは9世紀です。当初は、毎日のお祈りの時（聖務日課）に歌う聖歌と、ミサで歌われる歌について楽譜がつくられました。その旋律を装飾する、あるいは歌詞を解説する形で少しずつ新しい曲が紛れ込むようになりました。その時に、フランス語の歌や、あるいは同じ旋律を2回繰り返すなど民衆の歌の要素が入り込んでいきます。まったく新しい曲としてつくるのではなく、伝統的な音楽を少しずつ改作したり、補うような形で創作が行われ、やがて民衆の歌としてのクリスマスの歌「ノエル」が歌われるようになります。

音楽史の上では、クリスマスのミサの曲をもとに創作活動が発展し、同時に楽譜や音符も徐々に確立してきて、現代の五線譜のようなものが出てきたと考えられます。西洋音楽の歴史を考える時、クリスマスの音楽は西洋音楽の根本に関わるような存在だと考えられます。



▲貴重な中世の楽譜をスライドで紹介しながら講演が行われました。

▶質疑応答（抜粋）

Q グレゴリウス聖歌を広めるにあたり、この時期はどのような方法が取られたのでしょうか。

A 楽譜ができる前は、口頭で歌が伝えられ、広められたようです。聖歌のレパートリーを覚えるのに50年、100年かかったという記録が残っています。11世紀になると音の高さがわかる楽譜が出てきて、教えてくれる人がいない状態でも初見で歌えるようになりました。この、現在の五線譜にあたる楽譜の表記法は、教会改革に伴ってあっという間にヨーロッパ各地に広まったと言われています。

西洋中世の彩飾写本に見るキリスト教文化

テーマは、今回のイベントで展示された「彩飾写本」。本学教授であり、国立西洋美術館の客員研究員として彩飾写本コレクションの調査研究に従事する講師が、そこにみられる装飾要素などについて解説しました。

■キリスト教の普及・発展に重要な役割を果たした彩飾写本

活版印刷術が普及し始める15世紀後半以前は、書物といえば獣皮紙に手で書き写した写本のことでした。これらの写本は、約1000年に及ぶ中世の間、聖書や聖堂での儀式に使う典礼書、聖歌隊のための楽譜や個人用の祈祷書など、いろいろな形式を取りながら、キリスト教の布教・発展に重要な役割を果たしました。中でもさまざまな装飾が施されたものを「彩飾写本」といいます。



講師：駒田 亜紀子氏
実践女子大学 文学部
美学美術史学科 教授

彩飾写本にはどのような装飾要素があるのかを見ていきます。1つは書体です。文字も鑑賞の対象として重要な役割を担っていました。中世の代表的な書体として、丸みのある字体が特徴のロトゥンダ、ブルゴーニュ宮廷で文学作品の筆写に好まれたバタール、聖書や祈祷書などにしばしば用いられたゴシック楷書体などがあります。そして文章の始まりに大きなイニシアルが配されます。これも、制作された地域や写本の用途によってさまざまな形式や特色がありました。欄外の余白部分の装飾にも、だまし絵や異時同図法（1つの画面の中で一連の物語の異なる場面を時系列で表現する手法）など、いろいろな工夫が施されました。装丁も大切な要素です。今回展示した複製本に見られる巾着型装丁は、小型の祈祷書など、個人が携行する写本に用いられることがありました。革のカバーに型押し装飾がされていたり、留め金に模様がついていたりします。ベルベットで覆われ、四隅と中央の装飾金具の中に貴石がはめ込まれるなど、非常に豪華なものもありました。

■代表的な作品、またその見どころを紹介

今回複製本を展示した彩飾写本を紹介します。最初は『アレクサンデル6世クリスマスミサ典礼書』です。ローマ教皇のアレクサンデル6世（在位1492～1503）のためにつくられた豪華な大型のクリスマスミサ典礼書で、ローマ教皇のために作られたクリスマスミサ典礼書としては現存が確認されている唯一のものです。3人の画家が役割分担してつくったと考えられ、教皇のエンブレムや本人の肖像などが書物の中に描き込まれています。

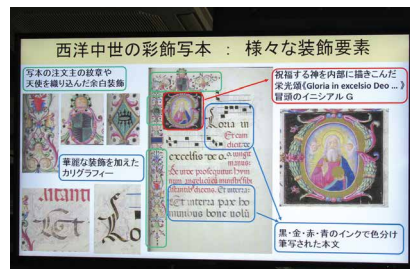
次が『巾着型装丁の祈祷書』で、1487～88年頃にドイツのケルンでつくら

れたものです。聖母マリアの受胎告知からキリスト幼年期・成人期、キリストの受難・復活から最後の審判までの物語が、41点もの挿絵により紙芝居風に構成され、お祈りしながらキリストの生涯を追っていただけるようになっています。

3点目の作品は、現在のベルギーで16世紀初頭に制作された、『フィッツウィリアムの時祷書』です。時祷書とは、一般の信者が1日の決まった刻限にお祈りを捧げる時に使われたものです。中世後期には、裕福な市民が豪華な作品を注文することがありました。この時祷書は、4人の画家によって制作されたと考えられています。挿絵と欄外装飾が連動したページのレイアウトに興味深い点が見られます。

4点目は、同じく現在のベルギーで16世紀前半に制作された、シモン・ベニング画『花の時祷書』です。あるページには全面にキリストが描かれており、その裏は白紙で、写本の中のどこにでも差し挟めるようになっています。このページは本体とは別注文で制作され、製本の段階でしかるべき場所に挿入されます。こうした手法は、シモン・ベニングのようにネームバリューのある画家に大きな絵を描いてもらうために用いられました。

最後が『ロレンツォ豪華王の時祷書』で、イタリアルネサンス最大の芸術庇護者であるメディチ家のロレンツォ豪華王（1449～1492）のためにつくられたと考えられています。15世紀後半のフィレンツェで活躍した最も重要な写本彩飾画家のひとりであるフランチェスコ・ロッセッリが担当したとされており、余白装飾にメディチ家のエンブレムが組み込まれています。小型でありながら、繊細な金の装飾をふんだんに施した、豪華な写本です。



▲彩飾写本を見る際の着眼点や楽しみ方が細やかに紹介されました。

▶質疑応答（抜粋）

- Q 今回のイベント以外で、彩飾写本をどこで見ることができますか？
- A 現在、西洋美術館に寄贈されたものがあり、調査や修復を進めています。2019年秋頃にお披露目の展覧会が行われる見込みです。

展覧会 12月13日(水)～21日(火) ※17日(日)を除く

場所：実践女子大学渋谷キャンパス 創立120周年記念館1階 プレゼンテーションルーム

毎年クリスマスの時期にヨーロッパのカトリック諸国で行われる、キリスト降誕に関連するシーンを人形飾りで再現する「プレセピオ」をキャンパス内で実施。また、中世ヨーロッパ時代にキリスト教の布教・普及に大きな役割を担った彩飾写本（複製）の展示も行いました。



▲プレセピオで再現されたキリスト降誕の様子。明かりを灯すと、より幻想的な味わいが増します。



▲彩飾写本の複製。写真左の左側が『フィッツウィリアムの時祷書』、右側が『巾着型装丁の祈祷書』。写真右が『アレクサンデル6世クリスマスミサ典礼書』。

来場者アンケートから（抜粋）

- 現在とは異なる楽譜の書き方や、クリスマスの曲の成り立ちがよくわかりました。実際に曲が聴けたことも良かったです。（女性・20歳代・その他）
- 音楽史からこの時代の曲について考えたことがなかったので、なぜそうしたメロディが今伝わっているのか、少しわかった気がします。（女性・30歳代・その他）
- 写本に興味があるので、今回の講演を受けてとても楽しかったです。細部にまでこだわりのみられる写本はとても魅力的だと思いました。（女性・10歳代・渋谷区在住）
- 彩飾写本のお話から、持ち主が愛着を持って使っていたらと想像されました。（女性・70歳代・渋谷区在住）